【優秀賞】

「復興を遂げた生き物の楽園」

宮城県仙台二華中学校
二年 針生 楓 永

「世界に一つだけの卒業証書・石巻の小六能登で被災の職人と紙すき。」
今年の六月、新聞の小さな記事が私の目にとまった。

記事の内容は、宮城県石巻市北上小学校の六年生が北上川のヨシを加工して紙をすき、和紙の卒業証書作りに取り組むというものであった。和紙作りを指導したのは、令和六年能登半島地震で被災した、石川県輪島市在住の遠見さんである。遠見さんは輪島市内で「能登仁行和紙」工房をしている三代目の方であり、本来は今年の一月下旬に北上小学校を訪れる予定だったが、工房は震災で、山の水を引いている貯水タンクが壊れてしまい、水浸しになった。また、釜や乾燥機など和紙作りに欠かせない道具も壊れたが、自力で再建し、今年は当初の計画より遅れたものの、ヨシを使った和紙作りを、二〇一四年から毎年児童達に指導している。遠見さんは「ヨシを使った和紙作りは全国的にも珍しく、それが卒業証書になるといった、地域を大切にする活動を応援し、児童達との交流は継続していきたい」と語っている。

原料となるヨシは、北上川河川敷のヨシ原で児童が刈り取ったものを、遠見さんの工房に送り、紙すきの原料に加工し、小学校で児童達が紙をすき、すいた紙を工房に持ち帰り乾燥させ、最終的に卒業証書となる和紙に仕上がる。といった手間ひまがかかる仕事である。

近くを流れる北上川河川敷には、広いヨシ原があるため、地域の活動として取り組んでいる。東日本大震災の時の津波は、北上川河口を五十キロメートルほど上流までさかのぼりました。地盤沈下も起こり、それまであったヨシ原の約半分が失われました。北上川は奥羽山脈と北上山地の支

流を集め、岩手県のほぼ中央を流れ、宮城県石巻市迫波湾に注ぐ全長約二百五十キロメートルの全国でも五番目に長い川です。そこに生えるヨシ原は河口から十キロメートル以上にわたって続き、日本有数のヨシの群生地になっています。ヨシ原には野鳥達が住み、春にはオオヨシギリ、冬は白鳥やカモ類、天然記念物であるオオワシやコクガンもやっています。ヨシ原に多くの野鳥が集まるのはエサとなる生き物が豊富に生息しており、一メートル以上にも成長するヨシ原は外敵から身を隠しやすく、安心して子育てをすることができからです。さらに、ヨシ原の周辺には昆虫類も多く生存しています。汽水域のヨシ原だけに暮らすヒヌマイトトンボは絶滅危惧種に指定されている貴重なトンボでこの辺りが生息地の北限といわれています。昆虫の大切な住みかではありません。人間の生活にも密接に関わっています。北上川は、生き物にとって大切な栄養分を支流から多く運んできます。また、ヨシは水質浄化機能があるため、多くの種類の魚介類が美味しく育ちます。このように、ヨシ原は生き物にとって、かかせないものであると私は考えています。冬に刈り取られるヨシは、今ではあまり見かけませんが、古くからある神社やお寺のかやぶき屋根や、よしなどに使われています。利用価値の高いヨシを守っていくと、多くのボランティアの方々清掃活動やヨシを増やすための移植活動を行っています。私の通う学校でも毎年、北上川河川敷でヨシの移植作業を行っています。私も今年の五月末に体験してきました。

私は、生き物にとって大切な水資源を守るための活動は、北上川のヨシ原だけに限らないと思います。これを機に、世界各地で行われている取り組みについても知りたい。そして、これからも水と生き物が共存している世界を目指していきたいと思えます。